



虹にじの足

学びナビ

比喩・象徴

比喩

皆さんは、詩に特徴的な表現方法の一つとして、**比喩**を学んだことがあるでしょう。比喩とは、似かよった何か別の事物を借りて、イメージ豊かに表現する方法です。中学校では、比喩の方法にさまざまな種類があることを学びます。例えば、次の表現を見てみましょう。

- a 小鳥のさえずりは音楽のようだ。 直喩法
- b 小鳥のさえずりは音楽だ。 隱喩法
- c 小鳥がきれいな声で歌っている。 擬人法ぎじんぽう

aやbは、「小鳥のさえずり」を「音楽」にたとえています。こうした比喩には、aのように「ようだ・ように」を用いてたとえる方法（直喩法）と、bのように「ようだ・ように」を用いずにたとえる方法（隱喩法）とがあります。隱喩法でたとえるほうが、より直接的で強いイメージを生み出します。

目標

- 情景を表す比喩や象徴しやうちゆう、言葉などに注意して読む。
- 目の前に見えた「虹の足」から、隠れたその意味について考える。

比喩の中でも、cのように何か（小鳥のさえずり）を人間のふるまい（歌を歌うこと）にたとえる方法もあるよ。こうした比喩の方法を特に擬人法と呼んで区別することがあるんだ。



象徴

これとは別に、象徴という表現方法も詩にはよく用いられます。

・ 平和の象徴

↓ 鳩はと

・ 日本を象徴する山

↓ 富士山ふじ

このように象徴とは、「平和」や「日本（らしき）」といった、単純には説明しにくいような意味や価値などを、それらを連想させる「鳩」「富士山」という具体的な事物で代表させることで、イメージ豊かに表現する方法です。

この他にも、詩には次のようなさまざまな表現方法が用いられます。

倒置法

一文の中で語句の順序を逆にする

例 あのを空を見てごらん。

←

見てごらん、あのを。

効果 語順を入れ替えることで強調する

体言止め

名詞（体言）で一文を終える

例 小鳥がきれいな声で鳴いている。

←

きれいな声で鳴いている小鳥。

効果 最後の名詞を印象づけ、余韻を残す

繰り返し

詩の中で同じ表現を繰り返す

例 青い山 ↓ 青い青い山

山は、季節によって色が変化する。

山は色づく。夏は緑。

山は色づく。冬は白。

←

効果 内容を印象づけ、リズムを生む

効果 内容を印象づけ、リズムを生む



ヒント

- 「虹の足」という題名は、「僕」が見た虹のどの部分をどのように表したのか、これを比喩という点から考えてみよう。
- この詩の「虹の足」は、「僕」にとつてのどんな隠れた意味を表したものといえるか、これを象徴という点から考えてみよう。

↓ P 19 みちしるべ 1



虹にじの足

吉野よしの弘ひろし

雨があがって

雲間から

乾麵かんめんみたいまっすくに真直まっすくな

陽射ひざしがたくさん地上ちじょうに刺ささり

行手ゆくてに榛名山はるなが見えたころ

山路を登るバスの中で見たのだ、虹の足を。

眼下がんげにひろがる田圃たんぼの上に

虹がそつと足を下ろしたのを！

野面のづらにすらりと足を置いて

虹のアーチが軽かろやかに

すつくと空に立ったのを！

その虹の足の底に

小さな村といくつかの家が

10

5

▼ 虹にじ

虹色

▼ 乾カン

かわく 乾燥かんそう
乾いた土

▼ 麵メン

麵類

榛名山

群馬県中部にある山。

(19ページ)

▼ 抱

ホウ 抱負
だく 子どもを抱く
いだく 大志を抱く
かかえる 一抱え

すっぽり抱かれて染められていたのだ。
それなのに

家から飛び出して虹の足にさわろうとする人影は見えない。

——おい、君の家が虹の中にあるぞオ

乗客たちは頬を火照らせ

野面に立った虹の足に見とれた。

多分、あれはバスの中の僕らには見えて

村の人々には見えないのだ。

そんなこともあるのだろうか

他人には見えて

自分には見えない幸福の中で

格別驚きもせず

幸福に生きていることが——。

みちしるべ



① この詩に用いられている比喻表現を抜き出し、何を何にたとえたものか、考えよう。

② 「虹の足」を見て「僕」が発見したものは何かを考えよう。

10

5

▼ 頬 (頬) ほお 頬紅



吉野弘

「一九二六—二〇一四」

山形県に生まれた。

詩人。

詩集に『消息』『幻』
方法『感傷旅行』北入
曾『叙景』などがある。

《出典》『新選現代詩文庫
121 新選吉野弘詩集』に
よった。

言葉は記号である

私たちがふだんなにげなく使っている「言葉」とは、なんでしょうか。世界中の言葉に共通する特性は、それが「記号」であるということです。

例えば、日本語の場合「イヌ」という言葉は、「イ・ヌ」という音と、「イヌ」という文字で表され、動物の「イヌ」をイメージさせます。イメージする「イヌ」は人によってさまざまでしょうが、それは決して「ネコ」ではないでしょう。「記号」とはこのように、「音や文字」と「イメージ」が結びついたものです。

このことは、同じ犬を表す場合に、日本語では「犬」、英語では「dog」というような違いを生み出すことにもなります。すなわち、表す対象が同じであったとしても、その表し方は言語によって異なるということです。

つまり、それぞれの言葉の表し方は、その言語ごとに決められた単なる約束ごと、「記号」にすぎないのです。

しかし、言葉のこうした「記号」としての性質は、単に現実のものを指し示すだけでなく、同時に、現実のないものま

でも表すことができる、という魅力的な特性を言葉に与えました。

例えば、誰かが声に出して「イチゴ」と言ったとします。すると、これを聞いた人々の頭の中には、「イチゴ」のイメージが浮かぶことでしょう。けれども、この場所に「イチゴ」があるとはかぎりません。それにもかかわらず、人々の頭の中には真つ赤なイチゴのイメージが共有されているのです。

現実のないものまでも表すことができるという言葉の特性とは、このようなことです。この特性によって、私たちは「自分だけが経験してきたこと」を聞き手に伝えたり、「どこにも存在しない（想像の）世界」を創造したりできるのです。

詩歌や小説などの文学作品は、「記号」としての言葉の特性のうち、とりわけ後者の「どこにも存在しない（想像の）世界」を創造できる、といった特性をうまく生かして描かれているのです。